

〈はぎのみほ〉というものをまじまじと見る

初めてはぎのみほに会ったのはいつだったのか、どこだったのか、思い出せない。この一年の間のことだろうに、あいまいな記憶しかない。ふっと横を見ると、鼻の先が触れそうなほど近くに〈はぎのみほ〉はいた。一瞬ぎょっとした。が、「まあ、ええか」ということにして、なんとなくそのままの距離のままに居ることにした。

〈はぎのみほ〉を見ていると、他でもぎょっとするような距離の取りかたをする。人なら肌のキメまで見えるぐらい。鼻息がかかるぐらい。虫歯の数が分かるぐらい。目の奥まで見透すぐらい。当然、嫌がる人もいる。いくら美形でも、そんな距離でみられれば、美の枠組みから外れてしまう。一步下がってくれば、美形なのに。。。と周りが、本人が、頼んでも引き下がらない。〈はぎのみほ〉が見たいのは、美の形ではなく、「その人が確かにそこにいる実感」なのだから。

〈はぎのみほ〉は、社会に対してもぎょっとするほど近づく。社会なんて漠然とした、曖昧模糊としたものに距離なんて無関係なようだが、〈はぎのみほ〉は“それ”のごく至近距離に立つ。すると“それ”ははっきりとした輪郭を持って私の鼻先に現れ、私をぎょっとさせる。

たとえば法律。学生時代に法学部に在籍し、国際法を学んでいた〈はぎのみほ〉にとって、法律は身近な素材のひとつだ。観客になった人は、著作権や肖像権という耳では聞き慣れたものが侵されるかもしれない現場に立ち会わされる（『Super Star, Right?』）。たとえば行政システム。観客になった人は、メキシコの出生届をじっくりと見る。日本の戸籍抄本をまじまじと見る、ように仕向けられる（『Renaissance』）。そしてふと、それが紙であることに気づく。美術館の作品キャプション（『No one know what they wanted, Even』）やネットコミュニケーション（インターネットプロジェクト『Jackie in the Box』）も、まじまじと見る状況を作り、“それ”が何を含み、何を排除しているかを知らしめる。

社会は私達の容れ物であること、意外とそれは狭く、私達はその容器にぶつからないように躡けられ、上手に泳ぐ方法を教育されてきたことを〈はぎのみほ〉を通して知る……………という結論は私には不本意だ。もう少し、違う感情を〈はぎのみほ〉には抱いてしまう。

ぎょっとするほどの至近距離に立つこと。それは暴力でもある。〈はぎのみほ〉は暴力を行使している。当然、反撃をくらって相手から殴られる危険性もおかしている。人であろうと社会であろうと。その姿は、危なっかしくて、どこか滑稽でもある。それでも、〈はぎのみほ〉は、自分の身体と心をぎょっとする位置に立たせ、鼻息がかかるほどに近づく。でなければ、「人が確かにそこにいる実感」（見えない人に対しても！）も、「社会が確かにそこにある実感」（見えない社会に対しても！）を進むことが出来ないとも言いたげだ。その態度は、作品という形で反転し、「あなたはなぜ進むことができるの？」という問いになる、

でも、鼻の頭が触れそうな距離になんとか居続けることにした私は、（その問いに十分ぎょっとさせられながら）〈はぎのみほ〉自身に見惚れている。目の奥を覗き込んで、そこにある疾走と焦燥を不思議なものとして見ている。時折、共振するのはなぜかと、自分自身を映し込みながら。

美術ライター 山下 里加